

『郵便友の会』一九六〇年四月（日本郵便友の会協会）

国際文通と国際理解

大切なことは知っていることではなく、やれることである。

国立教育研究所 矢口 新

国際理解と言うと、われわれの頭の中にはすぐ外国のことについて知ることだということが浮かんで来る。学校でやっている学習も国際理解の学習というと、外国についての知識の学習が多い。それは決して意味のないことではないが、しかし国際理解ということとはそれだけではないように思う。外国のことを知るだけでは、物足りないように思う。

国際理解という言葉にもう一つ結びついている雰囲気は、外国のことが好きになるというようなことである。これは前の知識とはちがって、感情的なものである。それもまたそれだけでは物足りないように思う。

国際理解の学習の実験などでは、或る国を一つえらんで、その国のことをいろいろと勉強し、その国の人などに来てもらって話を聞くなどということをやると、その国が大体は好きになるようである。これは知識と感情と

が結びついている例であろう。こういうふうになると、国際理解の教育もかなり板についていると思うが、これでもまだなんとなくのたりなく思う。

日本の国際理解の教育は、大体この辺が限度で、ここまでは一生懸命やってくれている先生方もいて、相当な効果をあげていると思うが、実はこれではまだ座敷の上の水泳みたいなものではないだろうか。これだけではないかきめの細かい日本流の教育をしても、やはり島国の国際理解であり、生きた国際理解であり国際社会というものが現に出来ている世界の中で必要な国際理解にはならないのではないか。現在必要なのは生きた国際理解であって、観念的な国際理解ではない。知識と感情だけの国際理解は、観念的な国際理解であり、島国的国際理解だと思う。

私は東南アジアを旅行して来て、マラヤで

子供に会ったとき、私の家にもお前と同じくらしいの子供がいるから手紙を下さいとだけいって、私の名刺を渡してきた。そうしたら、帰国後しばらくして、プロフェッサー矢口の娘さんへという宛名の手紙が向こうの娘から来た。私は自分の娘の名前を教えることを忘れていたのである。しかし約束通り手紙が来た。

中学一年の娘は、この肉筆の手紙がなかなか読めなくて、字引をひきひき大変苦心してようやく読んだらしい。私も随分何度も訳をさせられた。さあそれから、返事を書く仕事が増えた。中学一年生の語学力ということもあるが、何しろ何から何まで初めての事である。こういう仕事はついおっくうになるものらしく、なかなか返事が書けない。私が手伝ってやるからといっても、やれ試験が、やれ何だといったのびのびになる。併し漸く出来たが写真を入れてやろうということになり、またそれをつくるのに時間がかかる。なにやかやで、やっと返事を出したのは、手紙をもらってからひと月近くもたっていた。また、向こうの手紙に東京の絵葉書が欲しいと書いてあったので、絵葉書のよいのをさがして送ってやるのにもずいぶん時間がかかった。

それからしばらくして、つい二三日前に、また向こうから手紙が来た。その中には、私がマラヤへ行って、YMCAで交歓している時の写真が入っていた。それはカラー写真であるが、カラーで焼きつけてあるので、なかなかこったものであった。子供はこれを見て大喜びであるが、やはり感ずることがあったとみえて、「ずいぶん気を使ってくれて」ね。カラーなんかで焼きつけてくれて」などとしきりに感心していた。「手紙を出すのは大変だけれど本当に良い勉強になる」ともいつている。

国際理解ということは、私はやはり観念的知ったり、好きだと思ったりすることではないと思う。文通とか交際とかを通じて、国際社会で振舞えるようになることだと思う。

日本人は島国根性の持主だと言われるが、実際そういう点では大きい欠陥をもっている。ただ観念的に知ったり、好きだと思つた程度ではとても国際理解とは言えない。その証拠に、実際外国人とつきあったり、文通したりすると、とても立派にふるまえない。逆に劣等感をもったりして、ショボショボしてしまう。また甘いよろい考えで文通などしても、本物の交際にならないで、恥をさらすことも多い。国際的な社会と文通をしたりする

には、生半可な気持ではとても出来ない。相
当な覚悟が必要なのである。そういう覚悟の
ない、また実践の伴わない観念的な国際理解
などというものは、どこかで馬脚をあらわす。
私は国でえらそうに国際理解などという
人が、日本へ来たアジア人に極めて不親切に
ふるまっている例を知っている。本物の国際
理解を育てるにはこれから相当の努力がい
る。文通などはそれにはよい場であるが、そ
れもまた本物にするには先生方の努力がい
ると思う。